

**2007年2月26日日本テレビ 定例社長記者会見****<発表>**

久保伸太郎社長：まず、はじめに役員の担務変更と人事異動についてご説明します。2月19日付で私が営業局と関西支社を担当し、現場復帰するということを内外にお知らせいたしました。さらに来月3月12日付で役員の担務と一部局長の異動を行います。定期異動に先立ち、編成局長に現在営業局長の小杉善信、営業局長に現在メディア戦略局長の高田真治が就任し、メディア戦略局は、当面、島田取締役が局長事務取扱として担当いたします。

そして、私自身は営業局、関西支社に加えて編成局、制作局担当となり、山根取締役は、その社長担務補佐になります。山根取締役は、PR室長の事務取扱も当分の間続けます。

それから、私どもと提携関係にあります韓国SBSのスポーツ・チャンネルに対して巨人戦の中継映像を今期も提供します。特に今シーズンは、ジャイアンツの主催の公式戦72試合のみならず、オープン戦も5試合を配信します。イ・スンヨプ選手の活躍はもとより、昨年から行ったこの中継の結果、韓国ではジャイアンツの選手の人気が高まっています。内海選手と林選手が、韓国に出向いてサイン会を行い、大変な人気を博したとも聞いています。加えて、韓国国内のみインターネット配信も新たに始めます。

また世界初の無料週刊マンガ誌のコミック・ガンボの発行を手がける株式会社デジマに対し、出資を決定しました。総額で1億6,000万円、出資比率は16%強になります。コミックは、依然として人気が高く、無料配布される雑誌に出資し、売上利益の還元を得るというよりは、ここに登場する作品の単行本化、あるいは将来のドラマ化、映画化等々のマルチユースに備えて、新しい権利ビジネスに対する出資の形としてこういう取り組みに参画することを決めました。

最後にこの度、フランス政府から日本企業としては初めてグランド・メセナ賞を受賞しました。ルーブル美術館のモナ・リザ展示室の新設、現在進行中のミロのヴィーナスの展示環境改善プロジェクトなどなどが文化的な貢献と評価していただいたものと思います。

## 1. 2006年度視聴率の動向及び、4月期の編成方針

記者：昨年度の総括と、それを踏まえた今年度の編成方針などを。

久保社長：2006年の在京各社の視聴率動向については、既に数字が出ているとおりで、特にプライムタイムが4位ということは、これだけ競争環境が変わってきている中で、何年ぶりということではなく、史上はじめて屈辱的な最下位だったと認識しています。

ただし、たしかに4位ではありましたが、民放にとって営業上重要な、私どもはコアターゲットと言っている1349（いちさんよんきゅう）13歳から49歳の層の視聴率動向では、実は2位でした。もちろん私たちは高齢者を無視して番組を作っていくという意味では決してありませんが、私どもが目指している方向に進んでいるという側面もあります。

かねてから弱いと指摘のあったドラマ枠は、支持をしていただける、視聴率がとれるというだけでなく、社会的に意義がある番組、あるいは新分野への挑戦や問いかけというコンセプトを持った作品を作っていきたいと思っていました。何度もお話している発明品というもので、少なくともその方向にはしっかりと歩み出しているのかなと思っています。

それから、特にゴールデンタイム、プライムタイムの1ケタ番組については、1ケタ番組を何とか追放しないと、せっかくよい視聴率、あるいは営業的にも大変評価していただいている番組が登場してもつながりが悪く、うまく全体のパワーになって表れないという側面があったと思います。そこで私どもとしては異例の決断、これも十数年ぶりですが、キー局としては始めて以来という覚悟で新しい番組を次々と投入していきます。一部は前倒しで始めた部分もあります。これは大変な、ある意味では冒険但也有りますが、こういう時代、私ども経営陣がリスクをとって、積極的に打って出くという姿勢を示すことも非常に重要だと思っています。

野球中継に関しては、少なくともテレビの前に座って見ていただく野球中継としては、残念ながら平均視聴率が2ケタに届かなかったということですから、まずどういう背景があるのかを分析していきます。同時に、BSデジタル放送の受信機の普及が2,000万台を超え、来年の北京オリンピックの年には3,000万台という数字も見えてきている状況であるわけですから、日本テレビグループとして、今なお相対的には非常に人気の高いスポーツソフトの代表である巨人戦をどのように展開していくのが編成戦略上望ましいのかということも踏まえ、地上波とBS日テレ、あるいは有料のCS放送G+と、多面的な展開を図る決断をしました。

山根義紘編成担当取締役：2006年の視聴率の動向は、反省点は多いのですが、久保から、1ケタ番組をなくせ、発明品をと指示されています。しかし、昨年度は4-10月の改編がうまくいかなかった部分もありますし、野球も伸び悩んだことがあり、今期4月については、1ケタ番組を一掃するため、枠移動も含めてプライムタイムを約10時間改編します。改編率が高いのはやはりレギュラー番組が悪いということであることは認識しています。

4月まで我慢できない枠もあったので、水曜日の20時、日曜日の20時は前倒しでスタートしました。営業上は4月、10月に改編してスポンサーが入れ替わるのが一番理想ですが、それ以前にPRの戦略等を考慮して、期中ではありますが、思い切って改編いたしました。2月4日からスタートした『世界の果てまでイッテQ!』、11~12%台が2週続きましたが、昨日(25日)は予算をかけた企画でもあり、ソフト面でも研究してきたことで17%と、新番組の3回目としては異例の高視聴率となりました。決して楽観はしていませんが、これにより日曜日は、『ザ!鉄腕!DASH!!』、『世界の果てまでイッテQ!』、『行列のできる法律相談所』と、これまでよりは視聴の流れが作れるようなソフトが開発できたのではないかと考えています。

子どもは途轍もないことを考えます。例えば「溶岩で焼き肉ができるのかな?」など、それを本当にやってみようというのがこの企画で、子どもたちが興味を持っている疑問を解明するために、できるだけロケにも連れて行きます。何とか15%を超えるソフトに育ててくれればと思っています。

また来週3月7日水曜日の20時から『今田ハウジング!!』がスタートします。

ドラマは、『マイ☆ボス マイ☆ヒーロー』、『14才の母』、『ハケンの品格』と、水曜日と土曜日の枠がワンクールごとに、どちらかが20%近い数字がとれる作品が出るようになりましたので、思い切ってドラマ枠を3枠にしました。火曜日の2時間ドラマは、コアターゲットにこだわって路線変更しましたが、なかなか数字が上がってこないため、思い切って2時間のドラマ枠をやめ、21時はバラエティ系、22時は、他局とバッティングしますが、ドラマ枠をつくります。私どももキー局としてドラマ3枠は、ぜひやってみたいと思っていましたが、制作体制、そしてプロデューサー、ディレクターなど人材もこの2、3年で育ち、ようやく3枠でも十分に戦える戦力ができました。

火曜日の22時はデスノートで人気の松山ケンイチさんで、7色の声を持つ14歳の少女とロボット好きな青年が数々の事件の謎を解いていくスパイドラマ『セクシーボイス アンド ロボ』を予定しています。

水曜日のドラマは松本潤さん主演の『バンビ〜ノ』、土曜日のドラマは前回、東山紀之さん主演で平均視聴率が18%を超えた『喰いタン』の続編『喰いタン

2』です。ドラマ3枠のスタートでもあり、手堅いラインナップで4月はスタートしたいと考えていました。

この他、火曜日の19時は、くりいむしちゅーの『ドリームビジョン（仮）』、そしてナイター枠はある程度固定した方が視聴者の皆さまに認知していただけるのではないかと思います、2時間の単発特番枠として、木曜スペシャルを復活させました。木曜19時の『天才！志村どうぶつ園』も15～16%のソフトに成長しましたので、土曜日へ枠移動します。土曜日は木曜日よりもC層、T層が高いので、今よりは環境がよくなると思います。土曜日は『世界一受けたい授業』、も15%を超えるソフトに戻ってきましたので、これで、土曜日、日曜日の19時台からの流れがよくなるような改編を目指しています。

他のレギュラーの番組の中にもまだ不安な枠がありますが、1ケタが出たら期中でも変えるという方針を今後も貫き、積極的に打って出たいと思っています。

この他、全日の編成では、『ズームイン!!SUPER』の枠の改革なども、いろいろ行っています。『スッキリ!!』も1月のリニューアル後には若干視聴率が上がってきていますし、『NEWS ZERO』も日によって10%台を記録しており、徐々に定着してきています。もう少し長い目で見て、これまでの問題点などをこの4月までに整理させたいと考えています。

いずれにせよ、スクラップ＆ビルドの精神で、この4月は戦いに出たいと思っています。ご存じのとおり、2月に入り、平均視聴率がゴールデン、プライムでも、13%台で三冠王がとれるような状況で、各局ともあまり差がない、だんご状態というのが現状です。各社の皆さまも十分承知の上で、改編されると思いますので、こちらはこちらで1ケタ番組を全部改編する方針で、今後とも戦っていきたいと思います。

## **2. 今期プロ野球放送体制、野球界・ジャイアンツへの期待**

記者：今期のプロ野球の放送について、また原巨人への期待なども伺いたいと思います。

久保社長：原巨人については、若いはずつとした強いチームに仕上がって、オープン戦から全力疾走、全力投球で活躍していただけることをもちろん強く期待しているばかりではなくて、ぜひそうあってほしいと強く願っています。

酒井取締役執行役員：皆さまと同じように期待をしています。今、野球自体が多少変わりつつあるかなと。セ・リーグにはじめてクライマックスシーズンゲームが導入され、今シーズンはどうなるのか、オールスター後、夏場から3位になればいいやという戦い方をするのか、スタートから必死になるのか、関心を持っています。現場には、ジャイアンツだけでなく、野球全体をどうとらえるか工夫するように現場に言っており、その一環として第2日本テレビで東京六大学をやってみようかと思っていたところ、早稲田にあの斎藤選手が進学したというわけです。

高校野球からは、楽天の田中選手はじめ、野球界全体が若返りつつあるかなと。彼らには是非活躍して欲しいです。このように徐々に変わりつつある中、BSでの放送は、これまでの地上波放送と何か差別化できないか、いろいろと考えており、来月には具体的にある程度お話しできるかなと思っています。

ただ、いずれにしても、野球界全体を盛り上げるのは私どもだけではなくて、それは活字の方、ラジオの方、雑誌の方でもあり、まだまだ野球自体はファンを引きつけるものはあると、期待をしています。

久保社長：野球中継を長い間手掛けてきた私どもとしては、プロ野球を含め野球というのは依然としてスポーツソフトの中では非常に人気が高いスポーツと捉えており、SBSスポーツ・チャンネルへの配信は、広がりを持った中継を、送り出していく取り組みの一環ととらえています。

六大学野球についても、斎藤君が登場する以前から様々な働きかけを東京六大学の野球連盟にしてきました。一部誤解して伝わったようですが、東京六大学の中継も地上波で全くやらないと最初から決めているわけではありません。私どもの持っている伝送路を最大限活用して、野球の人気の底上げを図っていくため、多面的な展開を行っていきます。

記者：プロ野球の中継の延長はなしということですか。

山根取締役：基本的にはドームの開幕の3試合は、皆さま興味をお持ちと思いますので、延長しようと思っていますが、ほかのゲームは今延長を考えておりません。

記者：あと、六大学野球の放送は、どのようにお考えですか。

酒井取締役：まもなく日程がきちんと出ますが、デーゲームですし、神宮という屋根のない球場であることなどを考えながら、地上波、BS、CS、第2日

本テレビと、私どもが持っているメディアで総合的発信するというのが基本的なスタンスです。

#### 4. 最近の営業状況と放送外収入の動向

記者：営業状況と放送外収入の動向についてお伺いします。

細川知正副社長：既に、第3四半期までの決算の数字、その他も開示されています。1月以降の状況ですが、1、2月ずっと低迷していたスポットがようやく前年を超えてきたというのが、放送事業に関する営業状況の明るい点かなと思います。ただ、そうはいつでも、現時点でまだ3、4月以降の状況は見えません。

放送外収入については、これも第3四半期の決算でおわかりのとおり、非常に好調に伸びて、結果として10-12月期の1クールだけですが、会社全体が増収増益になった大きな要因になりました。二本柱としては映画事業と通販事業。これは1月に関しても順調に推移していますので、調子はいいと思います。ただ、2、3月は、私どもが幹事をしている大きな映画のスタートがありませんので、数字としては10-12月期のような伸びにはならないだろうと思っています。

#### 5. 「発掘！あるある大事典Ⅱ」のデータ捏造問題を受けて

記者：先月から「発掘！あるある大事典Ⅱ」のデータ捏造問題で、各局情報系番組の取り組み方などが見直されていますが、日本テレビのチェック体制についてお話しください。

久保社長：番組制作のチェック体制については、10年以上前から情報番組を制作するにあたってのガイドラインや手引き書、各種規定などを作成しています。これは、必要に応じて改訂も重ねています。当然、その都度社内に周知徹底をさせています。

今回の件が発生した際は、私はたまたま海外出張中だったのですが、各局長レベルでは直ちにチェック体制の再確認をしました。私が出張から戻り次第、最初の局長会で今回の事態の重大性について重ねて指示をし、健康に関わるテーマについては特にチェック体制の徹底を図るよう指示しました。

それから、グループ会社の経営トップに対しても、定例の会議の席で世の中の動きを指摘した上、グループ会社においても、チェック体制を徹底させてほ

しいという指示をいたしました。

番組制作を外部委託する場合には、企画、取材、収録、編集それぞれの段階で日本テレビのプロデューサーがチェックしています。さらに、薬事法や健康増進法などに関連する番組、ドラマなどについては、番組担当者が考査部と相談した上で制作にあたっています。

定期的にコンプライアンス研修や健康食品に関する様々な法律についての研修会も開いています。たまたまですけれども、今回の件が報道された後に、いわゆる特保と呼ばれている特定保健用食品の放送での扱い方について、東京都や港区の役所の担当者をお招きして、日本テレビだけではなくグループ会社の人も出席できる研修会を開きました。このような形での研修会は定期、不定期問わず相当頻繁に開くようにしています。

## 6. 総務省からのヒアリングについて

記者：先日、総務省から、各局へのヒアリング調査があり、それについての調査結果が公表されたと思いますが、それを受けてのご感想は。

久保社長：情報提供など私どもの考え方を伝えるにあたっては、私どもに何か不祥事があったから呼び出しを受けて事情聴取をされるということではないという確認をした上でヒアリングに臨みました。

それから、情報の取り扱いについても、監督官庁としての情報管理の徹底をお願いしました。可能な限り、積極的な情報開示をしたつもりです。私たちとしては自信を持ってこういう体制で取り組んでいますということをお答えしました。特にご関心があったのは、例えば制作会社に契約等違反する条項があった場合に、ペナルティー条項等は設けていますかとか、ということで、そうした点についてもきちんとお答えしました。

記者：担当官庁の総務省が、監督権限を強化しようとしている、具体的に言うと、新しい行政処分案を放送法改正案に盛り込もうという動きがありますが、これについてはいかがでしょうか。

久保社長：行政処分を厳格化するという部分について、放送法改正案がどういう内容になるのか、民放連からの正式ルートではまだ伺っていませんので、伝えられる部分ということでお話しします。まず一般論で言えば、私どもジャーナリズムの世界に住む人間にとっては、やはり公的な権力の関与というのは、可能限り少ないほうが望ましいと思っています。

その上で、今回伝えられる放送法の改正案の処分の部分については、率直に

申し上げて、よくぞここで止まっているなという感じです。つまり、事態は非常に深刻なものだったわけですね。

記者：もっと厳しい内容を予測していたと。

久保社長：私どもが伝え聞いている情報によると、それはやはりそんなに甘いものではないということですね。しかし、様々な報道がなされていく過程で、やはり表現の自由とか言論の自由、多様性等について公的な権限が直接関与することについては、慎重論も同時に浮上してきたのはご存知のことと思います。私どもとしては最小限にとどめていただきたいというのは、常に持っている強い願いでありますし、そうしていかなければいけない。ただし、そういうことを要望する、希望する以上は、私ども自身が自浄作用を高めていかなければいけないと思っています。その上で、今回伝えられる放送法の改正案については、よくぞここで止まっているなというのが率直な印象です。

記者：「止まっている」というのは、それでももっとないほうがいいということなのか。この程度ならしょうがないかということなのか。その辺のニュアンスについて教えてください。

久保社長：文字通りですね。原則は、私どもジャーナリズムの世界に住んでいる人間にとっては、公的な権限による関与は最小限にとどめたいというのが120%の強い願望であり、希望ですけれども、今回の事態の発展、展開に照らしてみると、よくぞここで止まっているなというのが率直な感想です。ですから、立法府にいる皆さまとか行政府にいる皆さまは、それ以上に非常に厳しい意見の持ち主も、少なからずあるということですね。

記者：関西テレビの対応の仕方が、ちょっと説明責任の観点からもまずかったと、久保さんはお考えでしょうか。

久保社長：この席で、普段は水と空気のように感じているかもしれない表現の自由、言論の自由、多様性、多元性の確保等について、これは大変な問題ですよ、こんな条項を入れたらどうでしょうか、ということをお話しするつもりはありません。しかし、私が繰り返し申し上げているとおり、そういうことを要求する以上は、やはり自浄作用とか、自律的に自らを正していくという、それが同時にそなわっていないかぎり、いくら表現の自由だ、言論、報道の自由だと叫んでも、なかなか世の中の皆さまの納得は得られないんじゃないかと思い

ます。

記者：個別の番組になりますけれども、1月放送の『報道特捜プロジェクト』で、山中湖村がＢＰＯに苦情を申し立てるといったことがありましたけれど、あの件についてはどう受け止めていらっしゃるのでしょうか。

久保社長：2月23日の午後、日本テレビの報道内容への苦情申立についてという文書が、放送倫理・番組向上機構（ＢＰＯ）に届いていたことを私どもは確認いたしました。今日現在私どもが知る限り、ＢＰＯでどのように扱うかということを検討されているということだそうです。日本テレビとしては、番組で放送した報道内容には自信を持っています。

## 7. 大杉君枝アナウンサーの思い出など

記者：最後に、今月上旬、アナウンサーの大杉君枝アナウンサーがお亡くなりになりました。突然の哀しい出来事で驚かれたと思うのですが、何か思い出があればお話しください。

久保社長：所定の産休期間が終了すれば、現場に戻っていただけるものと思っておりましたし、これからさらなる発展を期待していました。大杉君枝さんは、明らかに日本テレビで活躍する場所を持っていたアナウンサーだったと私は理解しています。率直に申し上げて非常に残念です。

記者：ありがとうございました。幹事質問は以上です。

記者：改めて確認させていただきたいのですが、プロ野球中継で開幕3連戦以外に延長をやらないということの理由は。

久保社長：東京ドームでの開幕3連戦巨人－中日戦は、最大30分延長の対応と考えていますが、それ以外の地上波での試合については、原則延長なしと考えています。

私どもとしては、数年前からジャイアンツから放送権の業務委託を受けている読売新聞東京本社と、時代に合わせて試合展開をもっとスピードアップしてもらえないかとずっと話し合ってきました。通常これだけの本数を日常的にご覧いただく上では、やはり相当試合テンポを上げていただかないと、なかなか視聴者の皆さまを引きつけておくことは難しい。それは何もジャイアンツだけが努力してできる問題ではありませんし、日本野球機構自身で様々なゲーム運びのルール改正をしないとできないところもあります。それはずいぶん長いこ

とお願いしてきました。視聴者の皆さまも、野球ファンの皆さまも、同じチャンネルで2時間以上じっとテレビの前に座って、どんな試合展開になろうとも、絶対にチャンネルを変えないという視聴習慣というのは、なかなか難しい時代になりましたね。

それから、私ども上半期は他局に比べてナイター中継の地上波での本数が非常に多いということから、延長によっては後の番組の開始時間が相当遅くなるわけです。野球ファンはそれで満足していただけるかもしれませんが、後の番組を待っていただいているお客さまには、その時々で番組の開始時間が移動する。そういう意味では、きちんとした視聴習慣というか、タイムスケジュールごとに番組が始まるというスタイルは確立したいなと考えています。

もう1つは、やはり多様な伝送路が出てきて、私どもはCS放送にG+というチャンネルを持っています。ファンの皆様には巨人戦は必ず見られるようにしているということですね。試合が20時54分で終了しない場合には、引き続きG+で野球中継をお楽しみいただけるという方法をとってまいりましたし、そのG+の視聴可能世帯数も500万世帯を超えました。そういうことも踏まえての決断だということです。

(了)